

“*Either A or B*”における*either*の役割 ——コーパス分析に基づく意味論的・語用論的分析——

The Contribution of *Either* in “*Either A or B*”: A Corpus-Based Semantic/Pragmatic Analysis

水田 洋子 MIZUTA, Yoko

● 国際基督教大学
International Christian University

Keywords *either A or B*, *either*, 意味論・語用論, 取り立て詞, 対比, 未特定性, コーパス
either A or B, *either*, semantics/pragmatics, focus particle, contrast, underspecification, corpus

ABSTRACT

コーパスデータの質的分析に基づいて, “*either A or B*”における*either*の役割を意味論的・語用論的な観点から明らかにした。主要なケースの分類とその一般化を行い, 更に*either*とコンテキスト情報との関係をふまえて理論的に精緻化した。*either*を伴う表現の慣用化や日本語との比較も行った。“*either A or B*”における*either*は, 何種類かの観点ごとに, “*A or B*”の与える選択肢 {A, B}を所定の比較要素と対照させることにより, “*A or B*”に特定の意味(選択肢の排他性, free choice, 同質性, 網羅性)を加える。その結果が“*either A or B*”の意味である。*either*は, “*A or B*”に作用する取り立て詞と位置づけられる。上記「観点」は, 先行発話, 話者や聴者の背景知識, 話者の意図などのコンテキスト情報に基づいて, 語用論的に導入・解釈される。“*either A or B*”の具体的な意味は上記「観点」をパラメータとするため, underspecification (未特定性)の概念を伴う。

Based on a qualitative analysis of corpus data, the contribution of *either* in “*either A or B*” was investigated from semantic and pragmatic perspectives. Major cases were classified and generalized, and then theoretical elaborations were made, based on the relation between *either* and contextual information. Issues of conventionalization of certain expressions derived from “*either A or B*”, and the comparison with Japanese data were also discussed. *Either* in “*either A or B*” adds specific meanings (i.e., exclusiveness, free choice, same class, and exhaustivity of the options) to “*A or B*”, by contrasting “*A or B*” (specifically, *or* and the set of options {A, B}) with certain elements such as {A} and {B}. The specific meaning is determined according to the parameter called “perspective”, which is given by contextual information such as the preceding utterance, the background knowledge of the speaker and the hearer, and the intention of the speaker. Thus, *either* can be identified as a focus particle, with the parameter of above-mentioned “perspective”, rather than a single word with certain meaning. While the specific meanings of “*either A or B*” are semantically distinct, the process of determining the “perspective” involves pragmatics. Thus, the meaning of “*either A or B*” is analyzed in terms of underspecification.

1. はじめに

英語の“A or B”の表現（A, Bは名詞句、動詞句、文などさまざまなレベルの句で、AとBは同じレベルのもの）は、*either*を伴う場合と伴わない場合とがある。

- (1) a. She will come {either / \emptyset } on Monday or Tuesday.
b. You may eat {either / \emptyset } chocolate or cookies.
- (2) A: You may have chocolate or cookies.
B: May I have both?
A: No, you may have {either / \emptyset } chocolate or cookies.
- (3) A: You may have chocolate or cookies.
B: Which do you want me to have?
A: Well, you may have {either / \emptyset } chocolate or cookies.

上記（1a）および（1b）では*either*の有無による違いが明らかではないが、（2）および（3）では、*either*がない場合にはAの最初の発話の単なる繰り返しとなり、質問に対する返事として機能しない。“*either* A or B”（以下、*either*AorB）は、*either*を伴わない単なる“A or B”（以下、AorB）とどのような場合にどのような違いを生じるのか。

本論文は、コーパスデータの質的分析に基づいて、*either*AorBにおける*either*の役割を意味論的・語用論的な観点から明らかにする。主要なケースの分類とその一般化を行い、更に*either*とコンテキスト情報との関係、および*either*を伴う表現の慣用化や日本語との比較をふまえて理論的に精緻化する。

2. 先行研究の概観および予備的考察

2.1 先行研究の概観

先行研究には、*either*AorBを含む文（「*either*...or構文」）についての統語論的分析（Hofmeister, 2010; Schwartz, 1999）や、*or*およびdisjunction全般についての意味論的・語用論的分析が見られる

（Geurts, 2005; Nouwen, 2018; Simons, 2001）。

*either*AorBにおける*either*の有無の比較については、Geurts (2005) に次の記述がある。

Zimmerman urges that... exhaustivity is literally denoted by intonation or other devices, such as the particle ‘*either*’ in ‘*either*...or’. (p. 385)

According to Mandy Simons (p.c.), the use of ‘*either*’ is compatible with a rising intonation contour, the combination yielding a non-exhaustive interpretation. Not being a native speaker of English, I have no opinion one way or the other. Incidentally, Paris (1973) presents experimental evidence that disjunction with ‘*either*’ are more likely to be construed exclusively than their ‘*either*’-less counterpart, though the margin is rather small (75% vs. 67.5% according to Paris’s data). (p. 385, fn. 3)

上記をまとめると、Zimmermanは*either*が選択肢の網羅性を示す手段の1つであると述べているのに対して、Simonsは、*either*があっても*either*AorBの部分上昇イントネーションであれば選択肢が網羅的でない読みとなると述べている。そしてGeurts自身は、*either*が選択肢の網羅性を示すか否かについて意見を保留している。また、Paris (1973)は、*either*がある場合は（他の条件が同じで）*either*がない場合よりも、選択肢が網羅的であるという読みに傾くがその違いは小さい（75% vs. 67.5%）ことを示す実験的な証拠を提示している。しかし、これ以上の詳しいデータや説明はない。例えば選択肢の網羅性について、Paris (1973) が実験に使った例文の詳細などは明らかにされていない。そのため、例えば*either*の影響が見られたケースと見られなかったケースを比較すれば、コンテキストの要因などが関わっていた可能性が見出されるかもしれない。

Thomas (2021) は、*either*の“additive use”と“disjunctive use”に対して統一的な意味論的説明を提案している。後者は*or*と組み合わせる用い

る *either* で、本稿の分析対象である。また、*either* を伴う疑問文は選択疑問文 (alternative question) になり得ないことを指摘してその理由も説明している。しかし、disjunctive use において *either* の有無が生じる意味論的・語用論的な違いについては議論していない。

McCawley (1998, p. 317) は、*either* を伴った場合の “illusion of an exclusive or” を会話の含意 (Grice, 1989) に帰着させている。Nicolae & Sauerland (2016) は、実験データを基に、AorB と *either*AorB を同じ条件で比較すると後者の方が *exclusive-or* の読みの指向性が高いことを示している。Rullman (2002) は、*either* の異なる用法の通時的な発達について議論している (additive use が最も新しい)。

以上のように、*either*AorB における *either* の役割についての先行研究はあるが限定的で、これを系統的に分析する実証的あるいは理論的な研究は未開拓の領域と思われる。

2.2 予備的考察

次の (4a) ~ (4c) は、AorB (下線部) を含む文であり、それぞれ A と B が名詞句、動詞句、および文の場合である。

- (4) a. Bill met Ann or Fred yesterday.
b. Ann sang or danced.
c. Ann sang or Fred danced.

上記のどの場合にも、AorB は「A と B の少なくとも一方が該当する」という意味を表す。例えば (4a) は、「Bill が Ann と Fred のうち少なくとも一方に会った」という意味である。

(4c) のように A と B が文の場合には一般に、AorB は命題論理における選言 (disjunction) を表す。すなわち、文 (4c) が真であるための必要十分条件は、命題 A と B の少なくとも一方が真であることである。(4a) および (4b) も、(4c) のような文レベルの AorB に書き換えることができる。

選言には、A と B の両方が真である場合を含める *inclusive-or* と、それを含めない (すなわち A と B の片方だけが真のとき A と B の選言を真とする)

exclusive-or とがあるが、意味論的には *inclusive-or* の意味が基本であり、*exclusive-or* の意味は語用論的に生じると考えることができる (de Swart, 1998)。本稿ではこの立場をとる。更に、A と B が文以外の場合の AorB についても、A と B が排他的でない (広義の) *inclusive-or* を基本的な意味ととらえる。

例えば、下記の例を考える。

- (5) a. The next conference will be held in Boston or Chicago.
b. Soup or salad will be served for the starter.

上記の例は、*exclusive-or* の意味に解釈されるが、(5a) では会議の開催地は 1 箇所であること、(5b) では聞き手が選んだのは前菜が 1 品のコースであること、という言語外知識を使って語用論的に導かれる、と説明できる。

3. 方法

コーパス (Corpus of Contemporary American English, COCA) (Davies, 2008) を使って、*either* の用例を検索し、最初の 1000 例を保存した。それらのうち、additive use の *either* (例えば *I don't know, either* における *either*) の用例を除いて得られた 759 例をデータとして保存し、質的分析を行った。COCA における検索結果では、標準では各用例が 1 行で示されるが、必要に応じて、更に長い前後文脈を調べ直して分析した。

4. コーパスデータの質的分析

either の有無が単なる形式上のオプションにすぎず実質的な違いを生じていないと考えられるケースもあった。しかし多くの用例において、*either* の役割が認められた。主なものを以下に挙げる (コーパスデータは表記などの修正をせず原文のままとした。ただし用例中の下線は筆者による)。

4.1 形式面での機能

まず、*either*の形式面での機能として、*or*で表される選択肢のリストの構造を明確にする機能が挙げられる。*or*で表される選択肢、すなわち “ $A_1, A_2, \dots, \text{or } A_n$ ” における A_i ($i = 1, \dots, n$) を「第*i* (構成) 要素」と呼ぶことにする。下記用例 (6) ~ (8) におけるように、選択肢のリストが長い場合や埋め込み構造を持っている場合などは、*either*の使用が特に有効である。

- (6) At some point you either have to plug up the bleeding heart crap in the face of reality... or step up to the plate and put your time, home and heart
- (7) You can not have it both ways folks. Either Michelle Obama is a jaded, negative person whose single-minded excitement about her husband's success is not relevant because “she is not running for anything” (in which case, Hillary has no relevant experience). Or, what she says, does and thinks is important.
- (8) team will be Russ Smith, Luke Hancock, Angel Nunez, Chane Behanan and either Stephan Van Treese or Zach Price.
- (9) always have their faces covered with either masks, scarves, shawls, or what have you.

(6) ではリストの第1要素が長く、(7) では更に長い。*either*が無い場合、*or*が現れた時点ではじめて選択肢のリストであることがわかるが、*either*を使うことで、第1要素に先だって選択肢のリストの構造(フレーム)を設定することができる。すなわち、第2要素(以降)が後続することを早い段階で聴者に予測させることができ、特にリアルタイムの会話で有効と思われる。

(8) では*and*で連結されたリストの第5構成要素が埋め込み構造をとっている。*either*はこの構造を明確に表す役割を持つ。*either*の有無による違いを見てみよう。*and*で連結されたリストの構成要素に①~⑤の番号を付けて表す(太字は筆者による)。まず、(8)は以下の(8)'の構造となっている。

- (8)' team will be ① Russ Smith, ② Luke Hancock, ③ Angel Nunez, ④ Chane Behanan **and** ⑤ either Stephan Van Treese or Zach Price.

上記(8)'では、*or*のスコープは*and*のスコープよりも狭く、*or*によって与えられる選択肢のリストの第5構成要素に*or*の構造が埋め込まれている。(8)から*either*を除くと、(8)は以下の(8)''の構造をとる可能性も生じる。

- (8)'' team will be ① Russ Smith, ② Luke Hancock, ③ Angel Nunez, ④ Chane Behanan and Stephan Van Treese **or** ⑤ Zach Price.

上記(8)''では、*or*のスコープが*and*のスコープよりも広い。(8)において*either*を用いることで、はじめの(2)'の解釈のみが可能となり、構造的あいまい性が解消される。

(9)では、リストの構成要素のそれぞれは短い、数が多い。*either*が無い場合、これらの要素が*or*の関係なのか*and*の関係なのか、実際に*or*や*and*が現れるまでわからない。*either*を伴えば、*or*の関係であることを早い段階で示すことができる。

ただし、*either*の位置はある程度柔軟に前方へ移動でき、選択肢のリストの直前とは限らない(Hofmeister, 2010; Schwarts, 1999)。

4.2 Free Choiceの読み(FC-R)

以下の例では、*either*は「*or*を使って表された選択肢のうちどちら(どれ)の可能性もある」という読みが導かれる。

- (10) into a bankruptcy get to make demands on the interested parties that the latter can either accept or reject, suffering the consequences either way.
- (11) while beauty is either natural or artifactual, justice is always artifactual;
- (12) to confront him on a statement he makes. You will get several options to either keep confronting or let it go.

いわゆる「free choiceのor」は、一般には、(13a)のような許可を与える文に代表的に見られるorの一見特殊な読みを指す。

(13) a. You may have chocolate or cookies
(, whichever you want).

b. You may have chocolate and you may have cookies.

(13a)は、最後の括弧内がなければ、食べて良いのがチョコレートかクッキーがあらかじめ決まっている場合と、どちらでもよい場合とのいずれをも表すことができる。そのうち後者に注目すると、これは(13b)を論理的に含意する。一見、orがandに置き換わったように見えるこの推論は、伝統的な命題論理では導かれなため、そのしくみについて意味論と語用論の面から議論がなされている(Asher & Bonevac, 2005; Booth, 2021; Nouwen, 2018; Simons, 2001)。

free choiceの意味論は本稿の範囲外である。本稿では、上記のようにもう少し広い「orを使って表された選択肢のうちどちら(どれ)の可能性もある」という読みを「free choiceの読み」(以下、FC-R)と呼ぶこととする。

(10)～(12)において、orによって与えられた選択肢一例えば、(10)における“accept”と“reject”―は自明のものである。したがって、or単体では実質的な仕事はしていない。しかし、eitherを伴った場合、これらの選択肢のどちらも可能性があることが示唆されることが考えられる。更に詳しく見てみよう。

(10)において、まずeitherが無い場合を考える。orによって、自明な“accept”と“reject”という2つの選択肢が与えられる。後続の共起表現のeither way(「どちらにしても」)がFC-Rを前提とするため、先行するAorBにおいてFC-Rをpragmatic accommodation(Huang, 2015)として引き出すと分析できる。一方、eitherがあった場合は、eitherの意味機能により早い段階で直接的にFC-Rが引き起こされ、更に共起表現のeither wayがそれを強めると考えられる。

(11)において、まずeitherが無い場合について。すべての物は自然または人工物と考え、orの与える2つの選択肢は自明である。したがって、“beauty is natural or artifactual”という言語表現からは特に情報が得られない。(実際にはこの段階でFC-Rの意味に解釈されるのは、自然美と人工美のそれぞれの例を知っているという聴者の言語外の知識によってである。)“justice is always artifactual”が後続した段階で、whileの語彙意味論的内容により“natural or artifactual”と“always artifactual”との対比が行われ、“natural or artifactual”にFC-Rが導かれる。一方、eitherがあった場合には、“beauty is either natural or artifactual”という言語表現から、eitherAorBの意味として、FC-Rとexclusive-orの(後述のExc-R)の可能性が生じる。しかし言語外知識によってexclusive-orの可能性は排除される。そして、whileの語彙意味論的内容と後続の“justice is always artifactual”によってFC-Rが確認される。

FC-Rは、選択肢の集合{A, B}を、その真部分集合{A}および{B}と対照させる読みとみなすことができる。

4.3 選択肢同士の同質性を表す読み(1 class-R)

下記の例では、eitherによって「選択肢の中からどちら(どれ)をとっても違いはない」というニュアンスが生じると考えられる。つまり、当該のコンテキストにおける選択肢同士の「同質性」を表す読み(以下、Same class readingの略で1class-R)を表す。筆者は、「同質性」および“Same class reading”という用語を、“Whether A or B does not make a difference”の意味で使う。

- (14) probably due to the strong feeling that your worth is not currently being appreciated, either platonically or romantically. You probably feel that others simply do not understand you
- (15) commercial value due to what the young ladies had chosen to do with their lives either privately or publicly.
- (16) decisions, not to show how organized you are. If

the project plan is either too long or not up-to-date, it will be useless for making decisions.

(14)～(16)において、2つの選択肢 (“*platonically*” と “*romantically*”, および “*privately*” と “*publicly*”) は自明のものとして話者と聴者に共有されていると考えられるため、(10)～(12)の場合と同様に、*either*がなくても既にFC-Rが想定されていると考えられる。しかし、*either*を伴った場合には、単にどちらの選択肢もとれるというだけでなく、「このコンテキストでは、どちらの選択肢をとるかによって違いは生じない」,あるいは「選択肢のうちどちら（どれ）が該当するとしても（／かを問わず）」という、更に踏み込んだニュアンスが生じるのではないか。

(16)では、AorBの場合には「少なくとも一方」の意味になる。*either*AorBの場合、AorBと同様に解釈することもできるが、それに加えて、「AでもBでも同様に、意思決定の役に立たない」という読みが生じる。

上記では、1class-RをFC-Rから更に踏み込んだ意味を持つものとしてとらえたが、FC-Rを1class-Rの特殊ケースと考えることもできる。1class-Rでは選択肢同士の同質性により、Aが該当するならBも該当することになり、FC-Rが導かれる。1class-Rにおいては、AとBを一緒に扱う場合と別々に扱う場合とが対比されていると考えれば、FC-Rの場合と同様に、{A, B} が {A} および {B} と対比されている。このように、FC-Rと1class-Rの上位下位関係はどちら方向にもとらえることができ、そもそも両者の区別は不要なのかもしれない。本稿では両者の関係についてのこれ以上の議論は保留としてFC-Rと1class-Rのラベルを用いることとする。

4.4 選択肢の網羅性の読み (Exh-R)

下記の (17)～(20)においては、*either* は、「*or* が与える選択肢が網羅的である」という読み（以下、*Exhaustive reading* の略として Exh-R）を表す。

(17) fair selection of beer, as far as I can tell. I usually

get either a Coke or an iced tea (Coke in this case which is why I...

(18) a standard way that can be applied across the board. Definitions that exist are either too broad (to cover every nuance) or too narrow (hence very unique).

(19) the ultimate choice that's being presented to mankind is either evolve or perish.

(20) You can't have a little grace. You either have grace or you don't. Okay, fine. I have no grace.

2.1節の最初に述べたように、Exh-Rが生じることと*either*の有無は関係ないという指摘もある (Gurts, 2005, p. 385)。しかし、例えば (17) において、*either*がない場合には、次のように更に別の選択肢（下線部）を追加した文も違和感がない。

(21) [(17)の変形版] I usually get a Coke or an iced tea, and sometimes also an orange juice,

それに対して、*either*を伴う (17)では、飲み物の中で選ぶものが “a Coke or an iced tea” の2つに限定されるという、選択肢の網羅性の意味が生じる。このことから、*either*が選択肢の網羅性を表す役割を持つことが示唆される。

(19)～(20)においては、与えられた選択肢は両極端のセット（例えば “*evolve*” と “*perish*”）であるため、聴者がそれら以外の中間的なケースの存在を期待するのは自然である。*either*は、こうした聴者の期待をふまえてExh-Rを強調する役割を持つと考えられる。(20)では、中間的なケースが存在しないことを第1文が明確に述べた後、第2文がそれを具体的に言い換える目的で*either*AorBが用いられている。更に、第3～4文から、対話の相手が最初は中間的なケースを主張していたコンテキストで第1～2文が発話されたことが推測できる。

定量的には調べていないが、コーパス内にはExh-Rが導かれる例が頻繁に見られた。これは、4.1節で述べた形式面での機能と関係があるのではないか。*either*を配置することで、*or*の出現を

待たずとも *either*AorB のフレームが設定される。これは形式面にとどまらず、意味的にも選択肢がこのフレーム内におさまっていることを示すのに寄与するのではないか。

4.5 Exclusive-orの読み (Exc-R)

前出の (20) (以下に (22) として再掲) は、選択肢 A と B の排他性を示しているとも分析できる。

- (22) You can't have a little grace. You either have grace or you don't. Okay, fine. I have no grace.

“you have a little grace” という中間的なケースを、“you have grace” と “you don't have grace” という選択肢の両方に部分的に該当するケースととらえると、中間的なケースの否定は、2つの選択肢の排他性を主張することと同じである。

Exc-R が該当すると考えられるコーパスの用例は、下記のように、*either* がなくても (語彙) 意味論的な選択肢同士の関係から Exc-R が導かれるものが大半であった。

- (23) Well, gracefulness isn't something you can teach or learn. You've either got it or not.
- (24) Reader Nathan rang around to gas stations in new Jersey, and even ones in areas that had not been flooded either had no gas or were running low and had long lines.

語彙意味論的には Exc-R が導かれない *either*AorB については、以下のように、“you can not have it both ways” と共起して Exc-R が明示的に与えられるものが 8 例あった。

- (25) Sorry bigots, you can not have it both ways -- either grant us equal rights and benefits, or do not tax gays equally, as they do not derive the same benefits.
- (26) You can not have it both ways folks. Either Michelle Obama is a jaded, negative person whose single-minded excitement about her

husband's success is not relevant because “she is not running for anything” (in which case, Hillary has no relevant experience). Or, what she says, does and thinks is important.

上記の用例で *either* を除くと違和感がある。このことは、*either* に意味的な役割があることを示している。

5. 一般化

5.1 作例による考察

上記 4.1 節で行ったコーパスデータの質的分析結果の一般化を試みる。まず、以下の作例 (話者 A と B との対話) を使って考察する。

- (27) a. May I have chocolate and cookies?
b. No. You may have {either /#Ø} chocolate or cookies.
c. No. You may have chocolate OR cookies.
注) OR は、*or* に強勢が置かれたものを表す。
- (28) a. Which may I have, chocolate or cookies?
b. You may have {either /#Ø} chocolate or cookies.

上記 (27) ~ (28) において、a 文の質問に対する返事として b 文が発せられるとする。また (27) においては、a 文に対する返事として b 文と c 文を比較する。注目すべきは、(27) と (28) において、*either* を伴う文の解釈が異なっていることである。

(27) では、聴者の期待 (「両方食べてもいいか」) があり、*either* が引き出す Exc-R は、その期待と対照的なものである。*or* に強勢が置かれたもの (“OR”) も *either* と同様に、*or* を *and* と対比させる効果を持つ。次に (28) では、聴者の期待 (「どちらか一方だけ」) があり、*either* が引き出す FC-R は、その期待と対照的なものである。

いずれにしても、これらの例文で *either* は必須である。(27) では、AorB では *inclusive-or* の意味に解釈できるため、質問に答えたことにはならない。*either*AorB の場合、上記の対照の意味を生じ

ることにより, “chocolate or cookies” の inclusive-or の意味から “chocolate and cookies” の意味を除く Exc-R を引き出すことができると考えられる。(28) では, 「チョコレートかクッキーの一方を食べてもよい」が選択疑問文による質問の前提となっているため, AorB の形ではその前提を述べるだけで, 質問への返事とはならない。eitherAorB の場合, この前提と対照の意味, すなわち FC-R を引き出す効果があると考えられる。

ここで, AorB における inclusive-or と FC-R の概念の違いを明確にしておく。まず AorB は, ①「A のみ」, ②「B のみ」, ③「A および B」の場合に分けられ, inclusive-or は ③「A および B」の場合を含める。一方, exclusive-or は ③を除いて ①と ②のみを許す(すなわち, A と B のどちらか一方のみを許す)。例えば, “eat chocolate or cookies” において, inclusive-or はチョコレートとクッキーの両方を食べる場合を含める。FC-R は, inclusive-or とは異なる概念である。FC-R に関わるのは, 「A と B のうち許されるのが1つか2つか」という区別ではない。説明をわかりやすくするため, exclusive-or のケースに絞って考える。この場合, 許されるのは A か B の一方であるが, FC-R に関わるのは, それが A か B に定まっているかいないかの区別である。FC-R は, 後者, すなわち, A でも B でもかまわないという場合を表す。FC-R, すなわち「どちらでもかまわない」という条件のもとで, 更に, A と B の一方のみが許されるのかあるいは両方をとる(成り立つ)ことも許されるのか, すなわち exclusive-or なのか inclusive-or なのか, という区別が考えられる。しかし inclusive-or は FC-R を含意する。そのため, FC-R について考えるときには exclusive-or のケースに限定して考えればよい。

AorB の意味に関して, まず以下の2つの観点から ①と ②の区別ができる。

(29) AorB の意味に関する, 2つの観点からの区別

- 観点1: exclusive-or / inclusive-or に関する区別
 - ① A か B の一方 (exclusive-or=Exc-R), ② A および B も含む (inclusive-or)

• 観点2: free choice に関する区別

- ① A でも B でもよい (free choice), ② A か B が定まっている

ここまでの考察に基づけば, 暫定的に, 例文 (27) および (28) における *either* の役割は次のようにまとめられる。例文 (27) は上記の観点1に該当し, AorB についての期待や可能性は ②, *eitherAorB* に生じる意味は ①である。例文 (28) は上記の観点2に該当し, AorB についての期待や可能性は ②, *eitherAorB* に生じる意味は ①である。すなわち, *either* は, AorB の持つ意味のうち, コンテキスト内での期待や可能性のある方と対照的なもの (① vs. ②) に絞る役割がある。

しかし更に以下の例を考える。

(30) A: You may have chocolate or cookies.

B: May I choose?

A: Sure. You may have {either /#Ø} chocolate or cookies.

上記の例において, B は FC-R に関する質問をしている。そして A は FC-R をサポートしている。すなわち, このコンテキストでは, A の返事は, 先行する B の発話の内容と対照的ではなく, 同じである。A はまず “Sure” で FC-R を肯定し, 第2文の *eitherAorB* でそれを具体的に表現している。これは以下のように説明できる。

B の発話は FC-R に関する質問であるため, (29) に示した観点2をコンテキスト内に導入している。A の返事は, その観点2において FC-R をサポートしている。そこで, *eitherAorB* の分析は以下のように改訂できる。

(31) *eitherAorB* の意味 (改訂版)

コンテキスト内で, (29) に示す観点1が採られる場合には, *eitherAorB* は ①の Exc-R を表し, 観点2が採られる場合には, *eitherAorB* は ①の FC-R を表す。

例文 (27) および (28) については次のように

なる。(29)に示す暫定的な分析では、*eitherAorB*の意味(Exc-RおよびFC-R)は先行する発話が示すAorBの内容と対照的なものととらえたが、改訂版では、先行する発話(a文)はそれぞれ観点1および2を導入する働きをするととらえ、その観点のそれぞれにおいて、*eitherAorB*は①の読みを生じると分析する。

ここで、観点1または2の選択について議論する。以下の例は、先行発話が導入した観点とは異なる観点を採用得る可能性を示している(英語母語話者に確認済)。

(32) A: You may have chocolate or cookies.

B: May I have both?

A: Well, you may have {either /#Ø} chocolate or cookies, but just one of them.

上記におけるAの2番目の発話(以下、A-2”)に注目する。先行するBの発話は、観点1を導入している。しかしBの質問に対する直接の返事は、“but just one of them”により明示的に与えられる。話者Aはその関連情報を述べる意図で、先行する*eitherAorB*を使ったのである。

話者Aは、Bの質問から「チョコレートとクッキーの両方が欲しい」という含意を汲み取り、まず選択の自由度を強調している。その際話者Aは、*eitherAorB*の使用における観点2を選んでいる。聴者Bは、自分の質問が導入した観点1により*eitherAorB*の部分をExc-Rの意味に解釈する。しかし“but just one of them”とつながりに問題があるため、観点2に切り替えてFC-Rに修正する。(観点を変更した結果、読みが変更される。)

話者Aが先行発話が導入した観点1に逆らったにもかかわらず、その発話が適格となり得るのはなぜだろうか。*eitherAorB*と後続の“but just one of them”をセットにすれば、観点2を採用することができるためではないか。

以上から、「観点」は、先行発話だけでなく話者の意図も含めた広義のコンテキスト情報に基づいて決められることが示唆される。

5.2 コーパスデータへの適用

コーパスデータについても一般化を試みる。

例文(10)～(12)では、AorBによって与えられた選択肢は自明のものであり、また相補的かつ排反である(例えば“accept”と“reject”)。したがってAorBはExc-Rに限定されている。そのもとで*either*は、一方の選択肢のみが該当する可能性と対照させて、FC-Rを引き出す。すなわち、(29)における観点2が採られているときに、*either*は①のFC-Rを引き出す。別の言い方をすれば、*either*は、選択肢の集合{A, B}を、その真部分集合である{A}および{B}と対照させる役割を持つと考えることができる。

例文(14)～(16)では、*either*は「AとBのどちらでも構わない」という1class-Rを与えている。コンテキストあるいは背景知識において、AとBをそれぞれ取り上げた場合に結果に違いが生じるという想定あるいは期待がある場合に、それと対照的にAとBをひとつくりにするものとして1class-Rを生じるのではないか。例えば(16)は、書類が長すぎることに最新の情報にアップデートされていないことは、今の目的からすると同様に悪い(どちらもどちらだ)と述べている。

例文(17)～(20)ではExh-Rが導かれる。このうち(18)～(19)では、「～はAとB」という構文となっているため、*either*がなくてもExh-Rが導かれる。しかし、*either*は語用論のレベルで以下のような機能を持つと分析される。(18)～(20)では、選択肢として与えられているものは両極端のセットである。そのため聴者(あるいは話者も)が、それ以外の中間的な選択肢(例えば、「現状にとどまる」)があると期待するのは自然である。このようなコンテキストで、*either*は、与えられた選択肢以外の可能性を否定する効果を持つと考えられる。

5.3 まとめ

*eitherAorB*における*either*は、先行する発話、話者や聴者の背景知識、話者の意図などのコンテキスト情報により与えられた観点をパラメータとして、AorBの意味のうち特定のもの(Exc-R、

FC-R, 1class-R, Exh-R) を導く。それが出力としての *eitherAorB* の意味である。これを以下の (32) にまとめる。

- (33) コンテキスト情報により与えられた観点をパラメーターとして導かれる *eitherAorB* の意味
- 観点1: exclusive-or / inclusive-or に関する (*or* vs. *and*) → Exc-R
 - 観点2: free choice に関する ($\{A, B\}$ vs. $\{A\}$, $\{B\}$) → FC-R
 - 観点3: 同質性に関する ($\{A, B\}$ vs. $\{A\}$, $\{B\}$) → 1class-R
 - 観点4: 網羅性に関する ($\{A, B\}$ vs. $\{A, B, C, \dots\}$) → Exh-R

(33) の内容は更に, focus の観点 (Kadmon, 2001) から体系的にとらえることができる。*AorB* は $\{A, B\}$ の部分集合を表すが, 観点1では, *eitherAorB* は真部分集合に限定される。すなわち “A or B” を “A and B” ($\{A, B\}$ の全体集合) と対比させて, 後者を否定 (除外) する。観点2と観点3では, $\{A, B\}$ をその真部分集合と対比させて, 後者を否定する。観点4では, $\{A, B\}$ を, 「それよりも大きい」集合 ($\{A, B\} \subsetneq S$ である集合 S) と対比させて, 後者を否定する。いずれの観点においても, *either* は, *AorB* (具体的には *or* あるいは $\{A, B\}$) を何かと対比させて後者を否定する。

したがって, *either* は上記の「観点」をパラメーターとする取り立て詞 (focus particle) ととらえることができる。いずれの観点においても *AorB* と対比する対象を否定することから, 取り立て詞の *only* と共通点を持つ。

- (34) John only drank beer.

例文 (34) において, *only* の focused element が *beer* か *drank beer* かは, コンテキスト情報 (強勢を含む) によって決まる。いずれの場合も *only* は, focused element の対比要素を否定する。*eitherAorB* における *either* の場合は, コンテキスト情報によって与えられた観点により *AorB* の対比要素が

定められ, それを否定する意味 (Exc-R, FC-R, 1class-R, Exh-R) が生じる。コンテキスト内で特定の観点が定まらない場合には, 形式面での機能にとどまる。

6. 慣用化と語彙化

6.1 *either* NP

either NP の形の句 (NP は名詞句, 例えば *either way*, *either side*) は, 意味的には *eitherAorB* (A および B はともに名詞句, 例えば *either this side or that side*) に帰着できる。この形の表現は *eitherAorB* の意味のうち FC-R のみを持つことがコーパスデータによって示された。歴史的には, *either* の意味用法の中で最も古い (Rullmann, 2002)。*either way* は 89 件, *either side* は 51 件, *either case* は 3 件あった。下記に例を示す。

- (35) create an account with us if you like, or shop as a guest. Either way, your shopping cart will be active until you leave the store.
- (36) Some will make it out in the coming weeks, some won't. Either way, keep me in your readers people. If nothing else I need the
- (37) Republic of the Upper West Side, after all -- but I keep saying that either side could win.
- (38) It's fine to articulate a biased position (on either side), but some facts are facts.
- (39) have lost their jobs. Some of them have lost money on investments. In either case, they don't have much, or any, income to tax.
- (40) a reader to communicate directly with the database. In either case doing nothing with either one.

either way は, (35) や (36) におけるように文頭で “*Either way, ...*” の形で用いられる場合が多く, *anyway* と同じ意味の談話標識として文法化していると考えられる。*either way* の全 89 件中, 文頭の “*Either way, ...*” が 35 件, *but either way* が 4 件, *and either way* が 1 件, これら談話標識とみなせる

ものの合計が40件 (*either way*の用例全体の44.9%)であった。

6.2 *some*, *one*, および *any*との関連

*or*によって具体的な選択肢 (A, B) が与えられる場合, *AorB*は「それらの選択肢のうち1つ以上が該当する」という基本の意味を表し, *eitherAorB*はコンテキスト情報に依存して特定の意味 (Exc-R, FC-R, 1class-R, Exh-R) あるいは *AorB*と同じ意味を表す。なお, コーパスデータには, 選択肢が3つ以上の場合にも *eitherAorB*が使われている用例 (“*either A, B, C*” など) があった。

選択肢が明示されない場合はどうだろうか。選択肢が2つの場合には, 「1つ以上」という基本の意味は, *one (of them)* で, また「1つのみ」(Exc-Rの意味) は *just/only one (of them)* で表される。「どちらでも」(FC-Rあるいは1class-Rの意味) は, *either of them* あるいは上記6.1節で述べた *either NP* で表される。次に, 選択肢が3つ以上の場合, 「1つ以上」という基本の意味は, *some (of them)* で, また「1つのみ」(Exc-Rの意味) は *just/only one (of them)*, 「どれでも」(FC-Rあるいは1class-Rの意味) は *any (of them)* で表される。Exh-Rを表すには, *only some of them* (*only*は*some of them*を修飾) などが考えられる。すなわち, 選択肢が明示されない場合は, 特定の意味ごとに使われる表現が語彙的に異なる (*some, one, any*) が, 選択肢が明示される *eitherAorB* では, すべて *either* が用いられる。

6.3 Vagueness, Ambiguity, Underspecification

AorB, *either*, および *eitherAorB* の意味を, *vagueness* と *ambiguity* の観点から議論する。日本語ではともに「あいまい性」と訳される概念として, *vagueness* と *ambiguity* があり, 両者は区別すべき概念である。ただし, *vagueness* と *ambiguity* の境界は明確ではなく連続的であるという見方も提案されている (Murphy, 2010)。

AorB は *vague* である。特定の意味が選ばれる場

合は, コンテキスト情報による。

either は, コンテキスト情報により与えられた観点をパラメータとし, 所定の観点から選択肢 {A,B} を何かと対照させることにより特定の意味 (Exc-R, FC-R, 1class-R, Exh-R) を選ぶ取り立て詞とみなせる (5.3節)。関連するコンテキスト情報がなければ, *eitherAorB* は *AorB* と同様に *vague* となる。*eitherAorB* の出力としての具体的な意味 (Exc-R, FC-R, 1class-R, Exh-R) は意味論的な違いを持つが, 「観点」をパラメータとするため, *eitherAorB* の意味は *underspecification* (具体化されていない部分を含むこと, 未特定性, Bunt & Muskens, 2007) の概念を伴う。

7. 日本語データとの比較

日本語には *eitherAorB* の対応表現が何種類もあり, *AorB* との違いが語彙レベルで認められる。更に, *eitherAorB* の中での意味の違いについての語彙的な区別もある。

7.1 *AorB*の対応表現

まず, *AorB* に対応する表現として「AかB」が挙げられる。AとBをつなぐものとしては, 「か」の他に「または」や「あるいは」なども挙げられるが, これらはフォーマルなコンテキスト (例えば数学や法律などに関連する記述) や書き言葉で使われる傾向があるように思われる。口語的なものは「か」である。本稿の目的は *eitherAorB* と *AorB* の比較に基づいた *either* の役割の解明であるため, 以下では, *AorB* に対応する日本語表現を「AかB」に限定し, それに関連した *eitherAorB* の対応表現を議論する。

7.2 *eitherAorB*の対応表現

eitherAorB に対応する日本語表現を見ていく。最初に基本的な形について考察し (7.2.1節), その後でバリエーションを見る (7.2.2節)。

7.2.1 基本形

まず, Exc-Rについて, 次の例文により英語を

日本語を比較する。

- (41) A: I'll give you chocolate or cookies. Which do you want?
B: May I have both?
A: No, {either / #∅} chocolate or cookies.
B: O.K. Then, I want chocolate.
- (42) A: チョコレートかクッキーをあげますよ。どちらがいい？
B: 両方でもいい？
A: いいえ、チョコレートかクッキー {(のどちら) か / #∅} です。
B: わかった。じゃあチョコレート。

例文 (41) において、A の最初の発話における「チョコレートかクッキー」は AorB にあたる表現である。A の 2 番目の発話で、3 つのバリエーションのうち最初の 2 つ、すなわち「のどちらか」あるいは「か」を伴ったものは Exc-R を表す。それらを伴わない最後のものは AorB の繰り返しとなり B の質問に対する返事として機能しない。したがって、「A か B のどちらか」および「A か B か」は Exc-R の eitherAorB に対応する日本語表現と考えられる。

選択肢の網羅性を表す Exh-R における日本語の対応表現も同様である。

- (43) A: I'll give you chocolate or cookies. Which do you want?
B: Any other options?
A: No, {either / #∅} chocolate or cookies.
B: O.K. Then, I want chocolate.
- (44) A: チョコレートかクッキーをあげますよ。どちらがいい？
B: 他にはない？
A: ないわよ、チョコレートかクッキー {(のどちら) か / #∅} です。
B: わかった。じゃあチョコレート。

まとめると、Exc-R および Exh-R においては、eitherAorB に対応する日本語の基本表現は「A か

B のどちらか」および「A か B か」である。後者の「A か B か」は AorB に対応する「A か B」と類似しているが、最後の「か」の有無による違いが認められる。「A か B」は AorB に対応し、「A か B か」は eitherAorB (Exc-R および Exh-R) に対応する。しかし、最後の「(のどちら) か」が単独で eitherAorB における *either* に対応するわけではない。「A か B (のどちら) か」全体で eitherAorB (Exc-R および Exh-R) に対応すると分析する。更に、Exc-R については、「A か B (のどちら) か」は排他性を更にはっきりと示す。

次に、FC-R について比較する。

- (45) A: I'll give you chocolate or cookies. Which do you want?
B: May I choose?
A: Sure, {either / #∅} (chocolate or cookies) would be fine.
- (46) A: チョコレートかクッキーをあげますよ。どちらがいい？
B: 選べるの？
A: ええ。{(チョコレートとクッキーの) どちらでも / チョコレートでもクッキーでも / #チョコレートかクッキーは} いいですよ。

まず、上記のように A と B として名詞句を考えると、FC-R においては、eitherAorB に対応する日本語の基本表現は「A と B のどちらでも」あるいは「A でも B でも」である。

7.2.2 バリエーション

FC-R について、eitherAorB における A と B が名詞句以外の場合を見る。前出のコーパスの用例に対応する日本語訳を示す。

- (47) a. ... to make demands on the interested parties that the latter can either accept or reject, suffering the consequences either way.
b. ... 受け入れても拒否してもいいが、どちらにしても...

AとBが形容詞句あるいは動詞句の場合、*eitherAorB*に対応する日本語表現として、「A {ても／でも} B {ても／でも}」がある。「ても／でも」については以下の規則性がある。「～い」型の形容詞（例、「早い」、「遅い」、「若い」）の場合は、「ても」となり（例、「早くても」、「遅くても」、「強くても」、「弱くても」）、「～な」型の形容詞—いわゆる形容動詞—の場合は「でも」となる（例、「静かでも」、「有名でも」、「健やかでも」、「きれいでも」）。動詞句の場合には、「ても」あるいは「でも」となる（例、「歩いてでも」、「走ってでも」、「食べて」、「書いて」vs.「跳んでも」、「飲んで」、「読んで」）。動詞句の場合は、撥音便変化をする場合のみ「でも」になることが推測される。これは、動詞のいわゆるタリ形（例、「飲んだり」、「食べたり」、「走ったり」、「書いたり」）における無音／有音（「たり／だり」）の区別と同じことから、「ても／でも」のバリエーションは動詞語幹との音韻的同化に基づくものと考えられる。形容詞句および動詞句の全体における「ても／でも」まで含めた規則性の分析は、本稿の範囲を超えるため行わない。

- (48) a. ...decisions, not to show how organized you are. If the project plan is either too long or not up-to-date, it will be useless for making decisions.
b. ... プランが長すぎても 古くても, 意思決定の役に立たない。

AとBが形容詞句の場合の「AでもBでも」については既に述べたが、この例で注意したいのは、*either*がないAorBは1class-Rではなく単なる「または」の意味に解釈され、if節に対応する日本語表現は「(もし) プランが長すぎるか古ければ」となることである。*eitherAorB*の場合は、それと同じ意味と1class-Rの両方が可能となる。

下記のようなバリエーションもある。

- (49) a. ... while beauty is either natural or artificial, justice is always artificial.

- b. {自然（天然）のものだったり人工のものだったりするが／自然（天然）のものも人工のものもあるが} ...

- (50) a. ...commercial value due to what the young ladies had chosen to do with their lives either privately or publicly.
b. ... プライベートにで {あれ／あつても} 公にで {あれ／あつても}

すなわち、「AだったりBだたり」、「AもBも」、「Aで {あれ／あつても} B {あれ／あつても}」などである。

以上に見たように、日本語においては、*eitherAorB*に対応する表現が、AorBと、また*eitherAorB*内の個別の意味ごとに、語彙的に区別されている。しかしこれは*either*の語彙的あいまい性を示唆するわけではない。本稿では、*either*をコンテキスト依存の取り立て詞ととらえ、1つの表現*eitherAorB*がいろいろな個別の意味を表すと分析した。

8. 理論的含意と今後の課題

本稿では、*eitherAorB*における*either*の役割を議論するために、*eitherAorB*が適格となる用例を分析対象とした。しかし、AorBと*eitherAorB*の比較という観点からは、AorBが許容されて*eitherAorB*が許容されない用例を調べることも興味深い。

そのような例として、Thomas (2021) でも言及されている選択疑問文（日本語の「A、それともB」に対応するAorB）が挙げられる。また、命令文にorが後続する文（日本語の「A、さもなくばB」に対応するAorB）や、言語表現上のバリエーションを表すAorB、例えば“cold, or low temperature” (Ariel, 2020; p. 8, 例16) も、*eitherAorB*は不適格となる。また、“whether ...or” 構文にも*either*は共起できない。コーパスを使って*eitherAorB*が許容されない例を網羅的に調べて、*eitherAorB*に対する制約を明らかにすることが今後の課題として挙げられる。

eitherAorBにおける *either* を取り立て詞ととらえたが、特定の「観点」の決定に、*either* に置かれたアクセントが関わっているのだろうか。例えば、上記例文 (32) の発話 A-2 で、*either* への強勢の有無で Exc-R と FC-R の選択されやすさに違いが生じるのか。いろいろな eitherAorB において、*either* の有無だけでなく *either* への強勢の有無による違いも調べる価値があるだろう。

eitherAorB と AorB の比較は、*either* および *or* の全体像の解明に貢献することが期待される。本稿はその一部を行ったものと位置づけられる。*or* やそれと密接な関係のある *and* についての先行研究 (Ariel, 2012, 2016, 2020; Ariel & Mauri, 2019; 長辻, 2014; Nagatsuji, 2015) も、用例や方法論を含めて参考となる。

9. 結論

本稿の目的は、eitherAorB の用例を分析して AorB との違いを明らかにすることであった。コーパスデータの質的分析と理論的な精緻化により、次の結論を得た。eitherAorB における *either* は、先行する発話、話者や聴者の背景知識、話者の意図などのコンテキスト情報により与えられた観点をパラメーターとし、その観点ごとに定まった方法で、AorB の与える選択肢 {A, B} を何らかの比較要素と対比させることにより、AorB に特定の意味 (Exc-R, FC-R, 1class-R, Exh-R) を加える。その結果が eitherAorB の意味である。*either* は観点をパラメーターとする取り立て詞ととらえられる。AorB の意味には *vagueness* の概念が、eitherAorB の意味には *underspecification* の概念が、それぞれ関わっている。また形式面に関しては、*either* は *or* が後続することを示すマーカーとしての役割を持つ。

引用文献

Asher, N., & Bonevac, D. (2005). Free choice permission is strong permission. *Synthese*, 145(3), 303-323.
 Ariel, M. (2012). Relational and independent *and*

conjunctions. *Lingua*, 122, 1692-1715.
 Ariel, M. (2016). What's a distinct *or* alternative? *Journal of Pragmatics*, 103, 1-14.
 Ariel, M. (2020). *Or* constructions, argumentative direction and disappearing 'alternativity'. *Language Sciences*, 81, 1-17. <https://doi.org/10.1016/j.langsci.2018.08.002>
 Ariel, M., & Mauri, C. (2019). An 'alternative' core for *or*. *Journal of Pragmatics*, 149, 40-59.
 Booth, R. J. (2022). Independent alternatives. *Philosophical Studies*, 179(4), 1241-1273. <https://doi.org/10.1007/s11098-021-01706-0>
 Bunt, H., & Muskens, R. (Eds.). (2007). *Computing meaning: Volume 3 (Studies in Linguistics and Philosophy Book 83)*. Springer.
 Davies, M. (2008). *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*. Retrieved May 5, 2022 from <https://www.english-corpora.org/coca/>
 de Swart, H. (1998). *Introduction to natural language semantics*. CSLI Publications.
 Geurts, B. (2005). Entertaining alternatives: Disjunctions as modals. *Natural Language Semantics*, 13, 383-410.
 Grice, P. (1989). *Studies in the ways of words*. Harvard University Press.
 Hofmeister, P. (2010). A linearization account of *either ... or* constructions. *Natural Language and Linguistic Theory*, 28, 275-314.
 Huang, Y. (2015). *Pragmatics* (2nd ed.). Oxford University Press.
 Kadmon, N. (2001). Formal pragmatics: Semantics, pragmatics, presupposition, and focus. Blackwell Publishers.
 McCawley, J. D. (1998). *Everything that linguists have always wanted to know about logic...but were ashamed to ask* (2nd ed.). University of Chicago Press.
 Murphy, L. (2010). *Lexical meaning*. Cambridge University Press.
 長辻 幸 (2014). 節等位接続の全体像解明に向けて：統一的説明と二分的説明 欧米言語文化研究, 2, 59-74.
 Nagatsuji, M. (2015). The semantics of clausal coordination in Japanese: Concepts or procedures. 1-18. *Studies in European and American language and Culture*, 3, 59-74.
 Nicolae, A. C., & Sauerland, U. (2016). A contest of strength: *or* versus *either-or*. *Sinn und Bedeutung*, 20, 551-568.
 Nouwen, N. (2018). Free choice and distribution over disjunction: The case of free choice ability. *Semantics and Pragmatics*, 11(4). <https://doi.org/10.3765/sp.11.4>
 Rullmann, H. (2002). A note on the history of *either*.

- Chicago Linguistics Society (CLS)*, 38, 111-126.
- Schwartz, B. (1999). On the syntax of *EITHER...OR*. *Natural Language and Linguistic Theory*, 17, 339-379.
- Simons, M. (2001). Disjunction and alternativeness. *Linguistics and Philosophy*, 24, 597-619.
- Thomas, W. C. (2021). Toward a unified semantics for English *either*. *Proceedings of SALT*, 31, 446-465.

謝辞

本稿は、日本英語学会第15回春季国際大会（2022年5月14～15日、オンライン）における筆者の口頭発表の内容に大幅な改訂を施して文章化したものである。研究の構想を練る段階および執筆段階で、Katie Gruber氏に、筆者の作例に対して英語母語話者としての判定や有益なコメントをいただいた。また、本論文の最初原稿に対して、2名の匿名査読者から、極めて貴重な、示唆に富んだコメントを詳細にわたっていただいた。これらに対して、心から感謝致します。まだ残っている不備は、もちろんすべて筆者の責任である。

